2017.1.29　年間第四主日

山上の説教

マタイによる福音 5:1-12

（そのとき、）イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこで、イエスは口を開き、教えられた。

「心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。

悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。

柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。

義に飢え渇く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。

憐れみ深い人々は、幸いである、その人たちは憐れみを受ける。

心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。

義のために迫害される人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。」

説教

聖書はほんとうにわかりずらいなあ、と感じる個所です。わたしだけの感想かもしれませんが、この感じに賛成する人もけっこういるのではないでしょうか。

なんで貧しさが幸いなのか、悲しみが祝福されるのか、どっちも嫌なこと、不幸なことなのにマタイ福音書は喜べ、おおにに喜べといいます。

わかりずらいからここはひとまず置いておいて次にすすもう、そのうちにわかるかもしれない、と考えて次のページをめくることもできます。いままで、わたしはそうしていました。でも、あと何回マタイ福音書の５章を読むことができるのだろう。そう考えると今日のこの福音を聞き取るというか、聞き

分けるというかイエスのことばを知りたいと切実な気持ちが湧いてきます。

心の貧しい人々は、幸いである、天の国はその人たちのものである。
悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。新共同訳

さいわいなるかな心の貧しき者、天国はその人のものなり。
さいわいなるかな悲しむ者、その人は慰められる。文語訳

心底（しんそこ）**貧しい人たちは、神からの力がある。天の国はその人たちのものである。**
死別の哀しみにある人は、神からの力がある。その人は慰めを得（う）**る。**本田私訳（新世社）

マタイの８つの祝福のうち、はじめの二つの祝福を三つの訳（新共同訳、文語訳、本田神父私訳）で読み比べました。イエスのことばの意味を探る目的です。

「貧しい」という言葉の前に「心の」とか「心底」という説明が翻訳されています。原文の意味は「こころ」とか「霊」という意味です。本田訳の「心底」というのは意訳だと思いますが、本田神父が山上で語ったイエスのことばの意味を表すには一番ふさわしいと考えて訳したことばなのでしょう。また本田訳では「さいわい」ということばを「神からの力」とこれもまた意訳しています。学者からみればもとのことばから離れすぎているということになるのでしょうが、聖書がわからないという人からすれば（わたしもその一人）この本田訳は理解への手掛かりになります。

イエスは貧しい人が祝福されているといっています。これを逆にしてみます。

心の豊かな人々は、不幸である、地獄はその人たちのものである。（新共同訳風）
心底豊かな人たちは、神からの力に見放される。そして、天の国はその人たちのも

のではない。（本田私訳風）

イエスのことばとしてはずいぶんと嫌味ないい方になりますが、イエスが辛みをきかせて語ったことばのようにも聞こえないこともありません。

「悲しむ人々は、幸いである」というイエスのことばを本田神父にならって「死別の哀しみにある人は、神からの力がある。その人は慰めを得る」と聞いてみるとどうでしょう。

悲しむ人々の内容が「死別の哀しみにある人」と説明されることで、その悲しみは「神からの力」によって慰められる、それ以外の慰めは慰めにならない、気休めでしかないということが浮かび上がってきます。

じっさい悲しむ人を慰めることを人間はできません。悲しむ人は神からの力によってしか慰められません、それを祝福と理解するには難しいかもしれません。でも現実には人は人を救えないし、慰めることもできないのではないでしょうか。

仮に、このことを深く理解する人のことを「心底貧しい人」とすると、その人には神からの力があるのではないか、天の国はその人たちのものになっているのではないか、となります。

いろいろな場面で限界を感じることがあります。先週は飼っている犬が逃げ出して２キロほど追いかけて確保しました。あわてていてリードももたずに追いかけたので捕まえた後、どうやって家にもどるか困っていました。友人の家が近く捕獲現場の近くにあったことを思い出しそこで犬のリードをもらって帰宅しました。走って追いかけたので、わたしの息があがり体力の限界を知りました。

犬との追いかけっこで心の貧しさを知ったとはいいません。でもいま思うと、自分の限界や犬の限界、そして私の寿命や犬の寿命。おもいがけない友人の親切、いろいろな事柄を思い起こします。こじつけになりますが、神の見守

り、祝福の中に自分たちはいた、いるのではないかと感じました。人間には死という限界があります。もちろん人だけでなく生き物には終わりがあります。おおげさに擬人化していえば、地球にも太陽にも宇宙にも限りがあります。

死別の哀しみにある人は神からの力を得る、そしてそのことを通して、心底貧しい者であることに気づき、そこでもまた、神からの力を得る。そして彼らは天の国の人となる。
順番が逆になってしまいましたが、マタイの５章「山上の教訓」をこのように読み解いてみました。最後に文語訳をもう一度引用しておしまいとします。

さいわいなるかな心の貧しき者、天国はその人のものなり。

さいわいなるかな悲しむ者、その人は慰められる。